２０１８．５．１２
国語教師「竹の会」５月例会 資料
川端　建治

「表現の特性」を解き明かす教材研究の方法

＊ 教材研究とは、その教材の**「学習価値（学習者が、その教材の内容的価値から得ることのできるもの)」**を明らかにするために、それを創りだしている**「表現の特質」**を解き明かすことである。

＊ 物語文教材の場合も説明文教材の場合も、その内容的価値を創り出している「表現の特質」には、**教材によってそれぞれ独自性** があるが、そこには、**すべての教材に共通した方法的視点**がある。それに着目して創られ方を解き明かしていけばよい。

１、物語文教材の場合

（１)、語りの視点をとらえ、語られている世界を解き明かそう。

ア、語り手は、どのような視点から語っているか？

イ、視点人物（主人公）は、だれか？（語り手は、主としてだれの目から見えた世界を語っているか？）

（２)、人物設定をとらえ、その関係やそれぞれの役割を解き明かそう。

ア、 視点人物（主人公）以外に、その人物と関わりのある対象人物はだれか？

イ、 視点人物（主人公）は、それらの人物をどのように見ているか？
＊同一の対象人物への見方の変化　　＊各対象人物への見方の比較

（３)、場面構成及びその展開と、主人公の体験の過程を解き明かそう。

ア、場面構成＜設定・発端（起）・展開（承）・山場（転）・結末（結）＞をとらえ、その展開の中で、出来事の変化に合わせて、視点人物（主人公）の生き方（行動・思い・考え）が、どう変わっていくか考えよう。
＊対象人物との関係の変化に着目する。

イ、主人公の生き方（思いや考え）が「大きく変わる場面」を見つけ、「どう変わったか」、「なぜ変わったのか」を考えよう。

（４)、主人公の体験の意味を考えよう。

＊ 主人公の体験の過程をふり返り、その体験について読み手の立場から価値づける。

（５)、その他の表現上の工夫を解き明かよう。

＊ 主題と関わる「題名の役割」、場面の様子や人物の気持ちと関わる「挿絵の効果」、その他場面や人物の描写と関わる「会話文・情景描写・比喩等の修辞上の工夫」についても、分析する。

２、説明的文章のの場合

＊ 説明的文章には、本来、読み手に自ら探究せずにはおられなくさせるような**「問題提起 の仕方の工夫」**や主体的に問題解決に取り組ませる**「説明の仕方の工夫」**がなされている。子どもたちに探究的な読みをさせていくためには、まず教師自身が、その教材の問題提起の仕方や問題解決のための説明の仕方の工夫を解き明かしておく必要がある。

（１）、「問題提起の仕方の工夫」を解き明かそう。

＊筆者の問題提起は、必ず題名や序論部に設定されている。そして、その設定の仕方には、次のような型がある。

ア、題名の中に、読みの視点となる問題提起が隠れている。

イ、序論部に、話題提示文・問題提起文が明示されている。

ウ、序論部の話題提示文の中に、問題提起が隠れている。

このことをふまえ、**読み手の興味・関心を本文内容に惹きつけ、筆者の提起する問題を「我が問い」と受けとめさせるための、筆者の工夫を解き明かす必要がある。**

その工夫には、つぎのようなものがある。

ア、内容への興味・関心を惹起させる「題名の工夫」は？

題名は、読み手がその説明文と最初に出会う言葉であり、その説明文の中で筆者が伝えようとした内容を端的に表したものである。しかも、その内容への読み手の興味・関心を惹起させるための表現の工夫がなされている。

イ、問題提起文に共感的に出会わせる「話題提示の仕方の工夫」は？

序論の段落に示される（隠されている）筆者の問題提起に対して、読み手が共感的に出会えるように、筆者は、話題提示の書き方をさまざまに工夫している。

（２）、問題の解き明かし方の工夫を解き明かそう。

＊ 序論で提示した解決すべき問題を解き明かす説明を、読み手にも探究的に読ませていくために、筆者は、解決の手がかりとなる事例の選び方やその示し方（配列・順序）をさまざまに工夫している。

ア、読み手の興味を惹起し、解決の過程を納得させる「事例の選び方」や「紹介の仕方」の工夫は？

本論に紹介される事例は、筆者が偶然に、適当に選んできたものではない。それは筆者が提起した問題の解決に必要不可欠な事例として選んだものであり、読み手の解決への意欲をかきたて、筆者が伝えたかったことを読み手に納得させるために、どうしても必要であった事例なのである。

イ、紹介された「事例の内容説明」を分かりやすくする工夫は？

読み手が事例の内容を理解しやすくなるように、段落ごとに、つなぎ言葉を示したり、事例それぞれの内容説明の順序をそろえたりしている。また、それぞれの事例の内容理解を助けるさし絵や写真を配置したりすることもある。